

ソフトテニス・テニスの歴史とその他諸々

ソフトテニス部 山下二郎（昭和 62 年卒）

テニスの起源については、明確な裏付けはありません。一種の宗教儀式として、紀元前のエジプトで行われていたようです。近代のテニスの起源については、これも諸説がありますが、フランスの修道院の中庭で、行われていたものに起源を求める説が有力なようです。歴史とは難しいもので、現在、高等学校で使われている教科書の内容が 30 年前とは大きく変わっています。歴史そのものは変わりませんが、その後の検証が変わるのです。

日本へのテニスの伝播については、これも人々の記憶によるところがあり、定かなものではありません。明治維新以降、外国公館の職員によって日本に持ち込まれたようです。その後、日本の体育の父と言われた坪井玄道氏が体操伝習所で広めたと言われています。当時は硬式ボールが高価で、日本では入手困難であったのでゴムまりを使用していました。その後、日本においてゴムボールの製造が可能となり、広く軟式庭球が広がっていきました。硬式庭球と軟式庭球（ソフトテニス）の歴史が交錯している大きな理由です。関西学院大学においても、軟式・硬式両方の競技をする学生がいたようで、ソフトテニス部の明確な創部年を定めた資料も見当たりません。

錦織圭選手がリオデジャネイロ・オリンピックで 96 年ぶりの銅メダルを獲得したときに脚光を浴びた 96 年前の銅メダリスト熊谷一弥氏は、もともと軟式庭球の競技者でありました。

国際性

1913 年(大正 2 年)に熊谷氏の母校慶應義塾が国際性の観点より軟式から硬式に転向し、硬式テニスが国内で広く普及しました。現在、ソフトテニスも世界大会を開催していますが、硬式テニスの認知度とは大きな開きがあります。上位入賞国はアジア大会上位国がほとんどです。

柔道が国際化を進め、オリンピック競技になっているのは見習うべき点が多くあります。日本固有のスポーツと思われがちな剣道にも世界大会があります。国際化を目指す競技は柔道の先進事例・工夫を採りいれるべきでしょう。

人気

ソフトテニスの競技人口は、中学生は比較的多く 37 万人、高校生では 8 万 3 千人に激減します。サッカーは中学生が 24 万人、高校生では約 18 万人と減少率が緩やかです（全国高等学校体育連盟、全国中学校体育連盟統計資料より）。

18 歳人口の減少も大きな要因ではありますが、用具の値段等の関係で中学校での硬式テニス部の設置が少なく、高校から設置する学校が多く、高校進学時に硬式テニスに転向する生徒が多いのも一因かと思われます。なお、ソフトテニスは所謂プロ選手がいま(注)せん。

ファイナルゲームの心理学

最近、試合を見ていて思うことがあります。ファイナルゲームはソフトテニスでは7ポイント先取ですが、どれほどのポイント差がつくと挽回不可能と選手は思うのでしょうか。勿論、ポイント差がいくらあっても諦めてはいけません。ただ現実的にはある程度、点差が開けば挽回は厳しいと思うのが人情でしょう。他の競技でも同じような事はあるでしょう。プロ野球で、負けている状況で、最終回ツーアウト、ノーボール、ツーストライクから安打を打つのは、心理的には大変な困難を伴います。その際、相手スタンドからの大きな声援も、劣勢側には大きなプレッシャーとなります。一方で、リオ・オリンピックで女子レスリング金メダル獲得の3選手は、当初、奇跡の逆転と報道されましたが、しばらくして言われなくなりました。3選手が練習してきた大学では、残り30秒からの逆転を想定した練習を積み重ねていたのでした。バドミントンの高橋・松友ペアも決勝戦で逆転劇を演じていますが、高橋選手は終盤の内容を覚えていないと語っていました。無意識のうちに身体が動くような、血のにじむような練習を積み重ねてきた成果でしょう。どれだけの点差があっても逆転できると思える精神力が必要でしょう。皆さんも、追い込まれた状況で冷静に実力を発揮できる能力を普段から色々な場面を想定して、養ってください。これはスポーツに限ったことではありません。

大学生の皆さんには、最後にやはり、マナー・ルール遵守のことを述べなければなりません。私が学生の頃も随分と色々な方からお叱りを受けました。一説ではプラトンの時代から、今の若い者とは言われていたようです。先輩に挨拶をしろ、電車内では大声で騒ぐな、廊下は走るな、爪を切ってこい、ハンカチを持ってきたさい、年長者に座席を譲りましょう、それぞれに理由があります。先輩や先生に挨拶するのは、今日一日、私の指導をお願いします、たっぷり吸収しますから。年長者に座席を譲るのは、今の日本があるのは、戦後の大変な時に復興を担ってきた皆さんのお陰です、短い時間ですが、私の代わりにどうぞ、お座りください、私の方が少し若いですから、と感謝の思いを込めて。

電車内で騒ぐことは自分たちには周りの状況が見えていません。騒いでいるとの認識は恐らくないのでしょうか。1人で電車に乗った時に、塾帰りの小学生が電車の通路で騒いでいると、読書をしているときなどは、腹立たしく思います。少し目線を変えて、考える余裕を持ちましょう。相手の立場に立って考えると状況は理解できます。心情までは理解できなくても。それぞれの事柄の意味合いを考えるとスムーズに行動できることが多いと思います。離れ小島で1人生活する場合、ルールは必要ありません。そのコミュニティの構成員が増えれば増えるほど、決まり事も増えます。スポーツを愛好する人は、ルールの大切さは今さら述べるまでもないでしょうが、スポーツでルールがないと、単なる遊び、または喧嘩になってしまいます。子どもの遊びでもルールは自然発生的に存在します。

なかには理由の説明できないルールもありますが、ほとんどの決まり事には合理的理由があります。何のためにこのルールがあるのか、今一度、考えてみましょう。ただ従来から踏襲してきたという意味のないルールは、なくしてもいいのかもしれませんが。時代に即

して変えなければいけないものもありますし、決して変えてはいけないものも、たくさんあります。それは、外からのアドバイスを踏まえながら、皆さんの経験、目線で適宜、適切に判断すべきでしょう。

最後にこの講座の開講に尽力いただきました KGAA 柳田隆久会長初め、新旧執行部の皆さま、根岸 紳先生、木本圭一先生に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。

本稿は 2016 年 10 月 13 日の講義でお話したものに一部加筆しました。

(注)

2016 年講義当時。2021 年現在、数名のプロプレーヤーがいます。社会人チームもありますが、未だ黎明期であり、ほとんどのプレーヤーが仕事との掛け持ちです。一部、日中にも活動している選手がいますが、ほとんどが正規の仕事を終えて練習をしています。当然、プロ野球、サッカーの J リーグ選手とは収入に雲泥の差があります。野球少年が甲子園を目指したり、プロ野球選手に憧れたりというように、小学生が夢を語った場合に、ソフトテニス選手が出てくるというのは、聞いたことがありません。ソフトテニスは 1991 年のルール改正で、硬式テニスに近いルールとなりましたが、ボールは同じままで、ルールは硬式に近くなり、硬式との区別が少なくなりました。ボールは軽いまななので、当然硬式ほどのボールスピードは求められません。国際性を目指すのであれば、観戦のしやすさ、競技の独自性、ルールのわかりやすさなど硬式に比べた違いをアピールしていく必要があると思います。



(写真提供：執筆者)



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)